

（現場から）

「社会人基礎力」と「国語教育」

荒木 竜平

ここ数年、私は異業種の方々に、事あるごとに「社会人に必要とされる国語力とは何か」と尋ねることにしている。回答として最も多いのは語彙力で、イメージに適した言葉がなかなか見つからないという苦い経験から繋がっている。次いで要約力。複雑に絡み合う事象を、人に伝わるように言語化する力でもある。いずれも社会人基礎力として、最も重要なコミュニケーション能力に関わる。では、社会人に必要とされる国語力を身につけさせるために、教育現場ではどのような「国語教育」が行われているのだろうか。

たとえば、良質の文章を多読させるなど、言語経験を重ねる環境を意図的に作り出すことで語彙を獲得させる。また、話の要点を押さえつつ、他者にわかりやすく伝達するトレーニングを行うことなども考えられる。しかし、これらの手法が後期中等教育の現場で行われることは少ない。原因は至ってシンプルで、大学入学試験に問われないため、特に進学校では取り組む必要がないのである。しかも数字を追いかける日々の中でそれだけの余裕は持てない。また、大学受験に求められる国語力は、「社会人」が求める国語力とも中等教育が求める国語力とも乖離している。

「文学教育」が、教養や鑑賞力といった教育的価値の名のもとで有力であることは否定し得ない。「文学教育」こそが「国語教育」であるかのように、文学作品に材を求めた授業実践報告は枚挙にいとまがない。そしてそれぞれの実践報告は、明らかに大学入試対策とは別の位相で対象化されている。たしかに、多様な読みを立ち上げる授業実践が、何より生徒の現実認識に役立つことは事実である。ところが、大学入試は、小説に対する論理的な読み方を要求してくる。あるいは一般的な倫理感覚を要求する。そもそも、たった一つの答えを追求する受験対策を含めた「国語教育」と、読みの自由性を根幹とする「文学教育」、あるいは「文学研究」とは全く別のものであるから、単なる選抜装置である文学的文章に関わる設問は、教育的価値や効用性を希薄化させているのも当然である。

逆に予備校講師が文学研究や国語教育に関わる論文を発表し、広く認知される事例は少ない。互いのテリトリーを侵さぬように「国語教育」の一部分だけを、無意識のうちに、かわるがわる温めてきた。つまり、「国語教育」の中で「受験教育」と「文学教育」の棲み分けを、多くの国語教師たちは内面化しているのである。そろそろこの奇妙な構造を断ち切り、生徒を一人前の社会人に育てるための「国語教育」を再構築すべきではないだろうか。大学入試の実際を無視するわけにはいかないが、中等教育での「国語教育」を、社会人基礎力に必要な論理的思考力を育てる論理的文章の読解や、コミュニケーション能力を育てる要約力や語彙力を育む教育に絞り込んでいけるような教育改革が求められる。

（図書館・サール高等学校）

“思考” 前夜の受験生たちと

水 島 千 絵

私の勤務校は受験校でもあるため、高校三年生の授業は受験に向けた指導が中心となる。当然多くの評論や随筆の一部を読む機会に恵まれる。評論の関心はなんといつても社会と人間。高名で才能あふれる多くの大人たちが、(乱暴に言つてしまえば)社会と人間というひとつのテーマをそれぞれの視点から「手かえ品かえ」論じているわけだ。だから、受験生たちは識らず知らずのうちにそれらを内面化し、今日の社会や人間が抱えている問題を自身のものとして共有している——はずである。

以上はあくまでも私の願望にすぎない。現実の大半の受験生たちの関心は、いかに解くか、いかに「正解」を見つけ出すかに注がれている。また受験制度がそれを望ませているのだから、彼らがそう思うのは必要なことでもある。

そんな中で、受験生に負荷をかけすぎず、ギリギリ伝えるべき線を模索している。そこで各方面の専門家の方には申し訳ないが、私は、ある一定数の評論を読み終わると、それらをごく簡単に総合し、そこから見えてくる世界をごく粗く素描することになっている。例えば近代科学を扱った評論があれば、その発想を他の領域に接続させてみる。すると、科学的な認識が、文明のイデオロギーやグローバリゼーションの課題につながる。

あるいは科学的認識では捉えきれないリスク社会や人間倫理のあり方が問われていく、といったように。

まったく別のテーマに見える評論が、実は同じ根っこを持っている。根っこまで辿らせることで、提起されている問題が、実は「正解」や「答え」のない問いであり、読み手自身に直接跳ね返ってくる問いかけであることを感じさせたいと思つている。

つい先日、一人の生徒が手を挙げて質問した。「じゃあ、僕たちはどうすればよいのですか。」と。こう思わせられたら、ひとまず授業は成功である。彼が、「自分が」どうすべきか、という思考のスタートラインに立ったという意味で、である。「それはこの社会に生きている人間、つまりあなたがた自身が考え続けなければいけないことです、もちろん私も。今は受験でそれどころじゃなければ、大学に入ってからで遅くはない。」と、答えておいた。生徒に多くを求めすぎるのは酷である。

彼らが大学に入り、もう少し大人になったら、それまでの詰め込み教育に対して思い切り批判を受ければよい。そして、「正解」のない人間や社会の問題について、初めて自分の頭で考えてくれればいい。その時、詰め込まれてきた知識が何かのとうっかりになる——だろうから。そう願つて日々受験生に接している。

(早稲田中学高等学校)

国語教室での課題と表現する内容とその質

齊藤 真子

表現力の向上を目指し、表現意欲を喚起する学習材の開発に取り組んできた。特に力を入れてきたのは、短歌創作学習における可能性を探るというものだ。かつて勤務していた学校の学習者たちに、自分の思いを表現させるものとして適切だと実感し、夢中になって取り組んだ。私の求めた短歌創作の学習は、歌人を作るためのものではない。自分の思いを言葉に託す、それを友達が読み、共感するという、あくまでも表現意欲の喚起を図るものであり、それに伴って、表現力を向上させるというものであった。

私が修士課程に在学していた二〇〇六年、同期のゼミ生たちと「中学生・高校生の言語活動と言語生活に関する意識調査」を実施した。首都圏を中心とした一八校、約二〇〇〇名の中高校生からアンケートを実施したが、その結果から国語教室では「読むこと」に比重が置かれた授業が展開されていること、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」に対して苦手意識を抱いている学習者が多いことがわかった。その当時、私が接していた学習者たちは、伝えたいことがあっても、皆の前で話すのが恥ずかしい、自分の考えを伝えたときに友達からどのように思われるかが分からないから話にくいということを訴えてくること

が多かった。

あれから数年が経ち、学習者の表現に対する意識が少し変化しているように思う。ケータイ電話やパソコンが日常生活に定着したため、自分の思いを進んで発信することが以前に比べて不得意ではなくなっている。また、自分の考えを表現することが良いことだと小学生のころから学習してきているからか、自分の思いを他者に伝えようという意識も強くなっている。私が研究を続けている短歌創作学習への取り組みも、見直すときが来ている。テーマを決め、短歌を詠もうと伝えると、何てことのないように詠んでしまうからである。表現意欲が乏しく、表現力を向上させたいという願いを込めての学習であったが、いま、そこからの変換を求められているのだと思う。

「ところで、キリ子さんはどうなったのですか」

これは現在私が担当している中学校一年生からの質問。学校図書『国語1』『ものづくりに生きる』では、江戸切り子の第一人者である小林さんのものづくりに対する思いを読むことができる。その最後の授業でのこと。江戸切り子がガラス細工品であることも、小林さんの思いも理解した上での発言。果たして伝えるべき内容とその質の高まりはどうなのであるうか。表現する以前の「こと」の深まりが、不十分だったのだろうか。国語教室での課題は、やむことがない。

(静岡県三島市立中郷西中学校)

国語教育と私

小西理恵

「字が書けるようになって、夕日がきれいに見えるようになって。」

これは、識字学級で、字が書けるようになった学生が言った言葉である。私は、当時大学生だった。古典が好きで、将来はそれに関連した仕事に就きたいと漠然と思っていたが、言葉は一番生活で身近なようでありながら、政治、経済、法律や商業、人文学の中でも心理などのように、社会生活や就職に直結するようなものでないだけに、そもそも言葉を研究することや学ぶことに一体何の意味があるのか、自問自答する日々でもあった。その中で私は、冒頭の言葉に強く惹きつけられたのである。自分が研究してきたこと、学んできたことを生かす道を見つけた気がしたのである。言葉は、社会や人とつながるために、なくてはならないものであるということを痛烈に実感させられた。このことがきっかけで、教育の道に進んだのである。

小学校低学年の生活指導の中で、パニックになつている子供の気持ちを教師が言葉で丁寧代弁して、気持ちを整理することとで心を落ち着かせることがある。子供自身が自分の気持ちをうまく言葉にして、言葉を介したコミュニケーションが上達すると、パニックになったり、友達とトラブルになったりすることが減るのである。それだけ自分の気持ちを言葉にできること

や心を共感してもらうことは、人間にとって大切なことなのだろう。それはまた、言葉で人とつながり合うことでもある。

時に「自分の言葉」とは何だろう、と考えることがある。

「今日は、お空がないね。」

曇り空をみて、ある子供が言った言葉である。時に子供は、大人からみたら不十分な言葉でありながらも、はつとさせられるような表現をすることがある。この言葉は、青い空が見えないのと同時に、それが残念だったから「空がない」という表現に、そして、共感して欲しかったからこそ、「ないね」と語りかけたのだろう。いつもこの子の目に映る空は、どんな青さなのだろう。その子なりの言葉で、一番伝えたいことを表現する、それは、言葉が生まれる時でもあると思う。作文や文法の指導の一方で、一人一人の子供の、その子なりの表現に出会える時がとても嬉しい。

卒業文集や自己紹介で、好きな言葉を挙げることもある。自分を支え、勇気づけてくれる、温かい言葉がある。国語の学習の場は、言葉と出会う場だけでなく、言葉が生まれ、生み出される場であり、言葉を通して人と交流し、共感し、つながりあえる場でもある。情報化、国際化の中で、言葉の持つ意味や役割が変容している。言葉と人間を切り離さず、実感を伴った温もりのある言葉を大切に、実践を積み重ねていきたい。また、私にとって国語教育を研究する意味とは、実践を省察し、これからの道を示すものであると考える。先学の学恩に感謝しながらも、成果を子供達に還元していきたい。

(中野区立桃園第二小学校)

豊かに「拡散」する教室へ

美谷島 秀明

昨年四月に現任校に着任し、中学部の授業を担当している。本校に中学部が開設されたのは三年前のことで、今年の中学三年生が一期生にあたる。着任したばかりの「三期生」の私は、今年その一期生の授業を担当した。

毎日の授業で私が意識しているのは、生徒の「書く」時間と「読む」時間とを確保することである。「読む」ことを中心とする授業でも、そこで得た知識や解釈を踏まえて主体的に「書く」時間を持たせるようにしている。今年度、一期生の授業で能登路雅子「ディズニールランドという聖地」(『中学校国語3』学校図書)という評論を扱った。このときは筆者が「現実の空間の方が、今や確実にディズニールランドに近づいてきている」と述べているのを承けて、では「東京の町は本当にディズニールランドに近づいているのか?」という質問を投げかけてレポートを書かせた。教科書の評論以外に「ディズニ化」と呼ばれる現象について書かれたもの(能登路雅子「ディズニの帝国 アメリカ製テーマパークの文化戦略」の一部)も読ませてレポート作成に入っただが、レポートを書き上げるためには文章の内容を理解し、さらにそれを自分が生活する現実に引き寄せて考えていかなければならない。中学生には難しすぎるだろ

うかと心配していた。

しかしそれは杞憂だった。いくつかの優れたレポートが提出され、全体で成果を共有することができた。たとえばお台場という町については、「(イベントなどの)様々な演出は、お台場という非日常空間の中で、人々を無くならない魅力で絶え間ない消費行動に駆り立てている」とディズニ化が進行しているという立場で論じた生徒がいた。また、「お台場という場所は厳密に言うとおディズニ化していない」として「あまりに多くのディズニ化された『部分』が集合したために、お台場という『全体』が一つのテーマパークと化してきている」と留保を付けて現状を論じた生徒もいた。生徒のレポートは切り口も結論も多種多様で、そこに「答え」などは出てこない。しかし、「答え」を得ることを前提とせずに生徒が互いのレポートを読み合ったことで、結果的に出発点である評論の「読み」を深めることはできたように思う。

「読む」活動を中心とする授業は、ともすると授業者が「収束」させる形で終わりがちである。だが、「書く」活動を取り入れると授業の方向は「拡散」し、教室に「収束」と「拡散」との間で流れが生まれる。その流れの中に文章を位置づけることで、「読み」はより確かなものになっていくのではないか。一期生は「拡散」することの大切さと豊かさに改めて気づかせてくれた。この経験を活かして、新しい授業づくりを進めていくことが現在の私の一つの目標である。

(早稲田大学高等学院)